

令和6年4月5日

## 京口門だより No. 126

寒さが遠のき春の暖かさがおとずれてくるようになりました。桜の花も盛りをむかえ心も晴れやかになれそうです。桜の花は華やかばかりではなく、寂しさや哀れも伴うようです。有名な西行法師の歌に「願わくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」があります。

このところ紅麹の摂取による腎臓障害で亡くなるという事件がさかんに報道されています。紅麹は十分な研究開発の結果をへずにうり出された健康食品やサプリメントであるため、国の厳密な審査基準を通っていないものと言えます。トクホ(特別栄養補助食品)はあるていど国の審査基準を取っているものですが、一般の健康食品はそうではありません。大切な臨床試験といって人への投与による試験がなされていないようです。健康食品ですから薬害というのも適切でないかもしれません。健康食品と異なって医療に用いる薬品は、相当の費用をかけて研究開発され、しかも臨床試験による実際の治療経験が要求され、副作用のようなものがあればきちんと報告されねばなりません。一般の健康食品は実体をともしない製品を過大広告して販売しているように見えます。審査を通った薬品でもかつてはペニシリン事件、サリドマイド事件、スモン薬害など深刻な薬害が起こっています。実際に人に使ってみなければどんなです。

われわれの用いている漢方薬はどうかといいますと、長い年月をかけた臨床実験を重ねてきたものです。中国古代に漢方薬が見出されたときは、山野の薬草を一つ一つ口に入れ、毒になるか薬になるか調べていったと言われていました。薬の神様と言われる神農帝は「一日にして七十毒に遇えり」とあります。一つ一つの生薬の薬としての作用や毒について「神農本草経」として著わされ、その後おおくの薬能書が作られ、それによって漢方薬ができ上り、それを千年二千年かけて臨床試験を繰り返してきました。漢方薬には副作用はないとは言えませんが、腎臓に障害がくるとか骨髄に障害がおこるとか、重篤な副作用は起こらないような経験を積んで用いています。それは病める人に役立つ薬はないかと探求した先人の知恵の賜物です。

